
所 属 : 国際学部

職・氏名 : 教 授 ヴェール, ウルリケ

研究キーワード : 近・現代日本のジェンダー史・フェミニズム史、日独比較ジェンダー史

■研究テーマ

① テーマ : ドイツ人による日本研究にみられる、国家、民族、文化、ジェンダー (1873-1914)

概要 : 1873年に、ドイツ人の日本人像に大きな影響を与えたドイツ東洋文化研究協会が、在日ドイツ人(男性のみ)を中心に東京で創立された。本研究は、その会誌や論文集などを史料に、初期日本研究の担い手たちの自己イメージと彼らが構築した日本人像を、「国家」「民族」「文化」「ジェンダー」の観点から分析するものである。彼らにみられる日本への視線や態度は、当時のヨーロッパ人のコロニアリズムも、「東洋」としての日本へのあこがれも典型的に示している。この矛盾した日本の表象は、何百年も前から引き継がれた「東洋」のイメージだけではなく、当時のドイツ人(男性)の自己像やドイツ女性への期待などを反映していることを論じる。

② テーマ : 日本とドイツの社会運動における原子力とジェンダー

概要 : 2011年3月11日の福島原発事故以降、日本の脱原発運動やメディアにおける「子どもを守る母」の強調が目立ち、フェミニズムやジェンダー研究の理論的背景を持つ論者による賛否両論が見られる。本研究は、日本の1960年代半ば以降の反・脱原発運動と、ほぼ同時に誕生した女性運動であるリブやそれに続くフェミニズムに焦点を当て、両運動のなかで原子力とジェンダーがどのように関連付けられたか検討し、両運動の関係を考察する。具体的には、社会全般を変える射程を持つ日本の反原発運動とリブ/フェミニズムだが、原子力廃止(脱原発)を主要の課題とする反・脱原発運動の理論と実践にジェンダーはどう組み込まれ、逆にジェンダー秩序の解体を目指すリブ/フェミニズムにとって原子力は何を意味したのかを問う。また、戦後の社会運動史全体を視野に入れたうえ、両運動がどのような関わりを持った(あるいは持たなかった)かについて検討する。最後に、日本の反・脱原発運動と同様女性の活動が目立つドイツでの脱原発とフェミニズムとの関係について再考し、日本との比較をはかる。

③ テーマ : 戦後日本の平和運動にみられるジェンダーと国家

概要 : 戦後日本の反核・平和運動が大きく盛り上がった1950年代半ばにおいても1980年代前半においても、女性こそが平和を推進する国家横断的(transnational)な活動を積極的に担った。本研究は、両時代間比較の視点を取りながら、特に1980年代に焦点を合わせ、史料や当時の運動に関わった人たちのインタビュー等に基づいて、女性平和運動家たちの国家横断的な思想と活動を検討するものである。当時、ヨーロッパの女性運動と米国核ミサイルのヨーロッパ配備に反対する大規模の反核運動との関わりが日本で注目され、日本の女性運動や平和運動に参加していた女性にも大きな影響を与え、ヨーロッパの女性と様々な形で交流するきっかけとなった。このような関わりの中で、「日本女性」「日本とヨーロッパ」「女性と平和」などの概念や関係性が解体されたり、再構築・再生産されたりしている言説を批判的に読み、女性を主体として、国家を横断する運動にこそジェンダーと国家が常に影を落としていること論じる。

■研究テーマの応用例

グローバルな時代の社会に必要なと思われる、ジェンダー、国民、民族などに対する固定観念を破り、「女性」「男性」「日本人」「ドイツ人」としての自己を相対化する歴史研究である。「歴史」が激しく議論される現在、参考されたい。

■主な著書、論文

1997. *Frauen zwischen Rollenerwartung und Selbstdeutung: Ehe, Mutterschaft und Liebe im Spiegel der japanischen Frauenzeitschrift Shin shin fujin*. Wiesbaden: Harrassowitz.

2004. “A Touchstone for Transnational Feminism: Discourses on the Comfort Women in 1990s Japan.” *Japanstudien: Jahrbuch des Deutschen Instituts für Japanstudien* 16: 59-90.

2007. “Japanese Comfort Women: Sex Slaves or Prostitutes? An Issue of Feminist Politics and Historiography,” in C. Derichs and S. Kreitz-Sandberg (eds.): *Gender Dynamics and Globalisation: Perspectives on Japan within Asia*. Berlin: LIT-Verlag, pp. 103-122.

2007. 「『平等』と『差異』を超えて：大正初期の雑誌『新新婦人』にみられる『母性』の構築」バーバラ・佐藤編『日常生活の誕生：戦間期日本の文化変容』柏書房、pp.107-145.

2008. “Japanese and German Women. Constructing Gender, Race and Nation in Wartime Japanese Women’s Magazines,” *Hiroshima Journal of International Studies* 14: 75-95.

2010. “The German Merchant in Late Nineteenth Century Japan: Nationalism, Colonialism, and Contentious Masculinity in A.R. Weber’s Novel *Kontorrock und Konsulatsmütze*,” *Hiroshima Journal of International Studies* 16: 83-100.

2012. 「脱原発の多様性と政治性を可視化する：ジェンダー・セクシュアリティ・エスニシティの観点から」高雄さくえ編『「大震災」と私』ひろしま女性学研究所、pp. 80-94.

2013. “From Hiroshima to Fukushima: Gender in Nuclear and Anti-Nuclear Politics,” in HCU 3/11 Forum (ed.): *Japan’s 3/11 Disaster as Seen from Hiroshima*. Tokyo: Soeisha/Sanseido Shoten, pp. 203-233.

2014. (A.Germer と V.Mackie と共編著) *Gender, Nation and State in Modern Japan*. London: Routledge.

2014. “Gender and Citizenship in the Anti-nuclear Power Movement in 1970s Japan,” in A.Germer と V.Mackie と共編著の前掲書、pp. 230-254.

未刊. “Der deutsche ‘Mann der Wissenschaft’ in der ‘Sackgasse unseres Planeten’ : Die Anfänge der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens (OAG) als Konstruktionsprozess normativer Männlichkeit,” in Sven Saaler et al. (eds.): *Geschichte der OAG*. München: Iudicium.

■想定される連携先

・公的研究機関 ・教育機関など